

留学を終えて

聖マリア女学院高等学校 大森 美宙（アイルランド）

私は、アイルランドのダブリンという都市に10か月間留学していた。その留学中に体験したことや感じたことを報告する。

【ホストファミリー】 私は2つのホストファミリーの家にホームステイした。1つ目の家には4か月間、2つ目の家には6ヶ月間滞在した。最初のホストファミリーは、ファザー、マザー、シスター（12歳）、ブラザー（11歳）、犬2匹がいた。ファザーとマザーは厳しくとても真面目な性格だった。この家に来た初日に、一番上に Home Rule とある A4 の紙一杯に文字の書いてあるものを渡され、紙の内容について詳しく説明された。それからは、私は、彼らに迷惑をかけないように、ルールを破らないようにと常に気を張りながら生活していた。学校から帰ってきても、まだ学校にいるような気持ちだった。しばらくしても、この家に馴染むことができなかった。また、シスターとブラザーへの対応と私への対応の違いにも悩まされた。自分は泊まらせてもらっている身であるということはわかっていた。本当の家族のようにはなれない。しかし、親元を離れ、両親からの愛情を恋しく思っていた私には、その状況にすることが辛かった。今までの私が、いかに周りの人に愛され、大切にもらっていたかがよくわかった。改めて感謝しなくてはならないと思った。このホストファミリーと過ごしたおかげで、他人と生活すること、常に相手を尊重し、気遣うことの大変さを知ることができた。この経験をしたからこそ、また辛いことがあっても自分なら乗り越えられる。そう思えるようになった。2つ目のホストファミリーの家には、ファザー、マザー、大学生のホストブラザー、下宿しているインド人のサニーとトルコ人のオメットという男性二人がいた。みんな優しく、温かい人たちだった。私はこの家にクリスマスの2日前に到着した。それなのにホストペアレントは私にクリスマスプレゼントとクリスマスカードを準備して待っていてくれた。また、サニーも会ったばかりの私に大きなチョコレートボックスとカードをくれた。クリスマスは温かい気持ちで過ごすことができた。マザーはいつも私のことを気にかけてくれて、ファザーはいつも私に面白い話をしてくれた。マザーは私に「何か不満があったら、どんな些細なことでもいいから教えて。」「遠慮しないであなたの好きなようにしていいのよ。あなたが幸せであることが何よりも大切なことだから。」と毎日言ってくれた。彼らとは、毎晩食後にデザートを食べながらテレビを観ていた。この時間が好きだった。また、彼らにはブラザー以外に息子二人、娘二人の四人の子供がいた。全員家庭をもっており、それぞれ別の家に住んでいた。その中でも二人の娘たちはよく家族を連れてこの家に来ていた。彼女たちもまた優しく、温かい人たちで、私を大切にしてくれた。彼女たちの子供たちもとても可愛らしくいい子で、よく一緒に遊んだ。誕生日パーティーにも招待してくれて、楽しい時間を過ごさせてくれた。彼らは私のことを家族の一員のように

扱ってくれたおかげで私の留学生活がより豊かになった。彼らに出会えて本当に良かったと心から思った。

【学校生活】 留学した頃、私は17歳の高校2年生だったが、アイルランドの現地校の4年 Transition Year（日本だと高校1年生）という学年に転入した。Transition Year（TY）とは、アイルランドの教育制度における特別な学年。この学年では、学業に加えて実践的な経験を積むことができる。例えば、地元の企業や機関でのインターンシップ、社会奉仕活動、文化イベントへの参加などがある。TYは自己成長と将来の進路選択において重要な役割を果たす学年である。TYでは日本にはない教科がたくさんあった。特に印象的だったのは、Junk Kouture という教科だ。Junk Kouture とはリサイクル素材を使ってドレスを作るというものだった。何人かのグループになって、各グループで一つの作品を作り上げた。一般的な日本の高校では、受けられない授業である。時間割で Junk Kouture という単語を初めてみたとき、どんなことをする授業なのかまるで見当がつかなかった。この教科が印象に残った理由が、日本には同じ教科がないという理由以外に もう一つあった。それはアイルランド人の芸術的センスの高さである。その授業では最初にドレスのデザインを一人ずつ考え、紙に描いた。その後、全員が自分たちのデザインを発表した。みんな絵が上手く、個性豊かで、誰一人として似たデザインを描いた人はいなかった。ヨーロッパの国々では、芸術のレベルが高いと聞いていたが、それを目の当たりにし、日本との差に驚いた。私のグループでは、牛乳パックと梱包材を使って、ドレスを作った。自分たちで一からデザインや作成方法を考えて作らなくてはいけなかった。初めてやることで、同じグループの子たちとの意思疎通もあまりできなかったため、最初は思うように作業が進まなかった。期日までに作れるかととても心配だったが、締め切りに近づく頃には、作業にも慣れ、グループの子たちとのコミュニケーションも上手くとれるようになり、無事にドレスを完成させることができた。苦勞した分、出来上がったときの喜びが大きかった。私たちのグループは惜しくも賞をとることができなかったが、それでも満足だった。アイルランドでの10か月間の留学を通じて、私は大きく成長できた。初めての国での生活は、自己判断力を養う絶好の機会だった。新しい環境で友達を作り、日常生活を自分で切り盛りすることから、困難な状況にも柔軟に対応する力を身につけ、異なる文化や言語に触れることで、自分の視野を広げることができた。留学中、現地の学校で学生生活をことも大きな挑戦だった。最初は言語の壁や教育スタイルの違いに戸惑っていたが、努力とチャレンジ精神を持って取り組んだ。これにより、困難を乗り越えるための自信がついた。さらに、他言語でのコミュニケーションを通じて、自分の意見を表現し、相手との交流を楽しむ自信が生まれた。これらの経験は、将来の自分に対する自信につながっており、未知のチャレンジにも果敢に取り組む意欲を養ってくれた。アイルランドでの留学は、私の人生において貴重な自己成長の機会となった。

